

9 当院における透析妊婦に関する臨床的検討

山口 雅幸・関塚 智之・谷地田 希
 田村 知子・田村 亮・吉田 邦彦
 五日市美奈・能仲 太郎・生野 寿史
 榎本 隆之・高桑 好一*・後藤 真**
 成田 一衛**

新潟大学医歯学総合病院産科婦人科
 同 総合周産期母子医療センター*
 同 腎・膠原病内科**

今回透析施行婦人妊娠例の問題点などを明らかにするため、1984-2016年までの32年間に、当院で管理した同8症例のべ11妊娠について、診療録から後方視的に検討した。透析施行妊婦においては高率に羊水過多症が認められ、それに伴って早産のリスクが高いと考えられた。ただし、適切な管理により、生児を得ることも可能であり、産科及び腎臓内科の共同管理が重要であることが改めて認識された。

◎小児科

10 急激に循環不全に陥り、原因として急性心筋炎が考えられた18トリソミー児の1例

桑原 春洋・倉辻 言*・篠原 健*
 水流 宏文*・額賀 俊介**・丸山 茂*
 須田 昌司*

長岡赤十字病院小児科
 県立中央病院小児科*
 榊原記念病院小児循環器科**

症例は18トリソミー、肺動脈閉鎖、両大血管右室起始、動脈管開存の女児。日齢115の夜間に嘔吐、残乳増加があり、39.0℃と発熱した。LDH 647IU/L、CPK 1274IU/Lと逸脱酵素の上昇があり、心臓超音波検査でEF 7.4%と心収縮力の著明な低下を認めた。CRP 0.0mg/dL、PCT 0.074ng/mLであり、ウイルス性心筋炎と考えた。ガンマグロブリン、カテコラミンの投与を開始したが、日齢116の朝に永眠した。非特異的な症状で心筋炎を発症することがあり、早期の診断、治療が必要とされる。

11 インドメタシン予防投与による動脈管閉鎖を阻害する因子の検討

添野 愛基・桑原 春洋・小林 玲
 沼田 修・松下 仁美*・村井英四郎*
 伊藤 裕貴*・目黒 茂樹*・高橋 勇弥*
 渡辺 健一*・田中 篤*

長岡赤十字病院新生児科
 同 小児科*

2016年までの過去7年間に当院NICUでは71例の超低出生体重児にインドメタシン予防投与を行った。43例は予防投与のみで動脈管が閉鎖したが（閉鎖群）、28例は予防投与後に治療投与を必要とした（治療群）。5例で結紮術が行われた。両群間で、患者背景、合併症を比較したところ、治療群で母体の硫酸マグネシウム投与が有意に多く（51.1% vs 78.6%, $p=0.020$ ）、臍帯血マグネシウム値も有意に高値だった（ $2.6 \pm 1.0 \text{mg/dl}$ vs $3.7 \pm 1.1 \text{mg/dl}$, $p<0.001$ ）。

12 医療再編と周産期医療の変化

—新生児を中心に—

小嶋 絹子¹⁾・和田 雅樹¹⁾・風間 芳樹²⁾
 加嶋 克則²⁾・鈴木 孝明³⁾・沼田 修⁴⁾
 安田 雅子⁵⁾

新潟大学地域医療教育センター
 魚沼基幹病院小児科¹⁾
 同 産婦人科²⁾
 魚沼市立小出病院産婦人科³⁾
 長岡赤十字病院新生児内科⁴⁾
 同 産婦人科⁵⁾

当院は医療再編により2015年6月に開院し、魚沼医療圏に初めて地域周産期母子医療センターが設置された。再編前後2年間の患者動向からセンター開設の効果を検討する。病的新生児の入院数は、開院前の小出・六日町病院の合計に比し2倍に増加し、その内の40%が早産児であった。魚沼圏域から長岡赤十字病院への新生児搬送は1/6に、長岡赤十字病院NICUの入院数は25%減少した。地域医療の充実に加え、高次センターの負担軽減の効果を認めた。